慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	横浜市立つつじヶ丘小学校における実践報告
Sub Title	
Author	古石, 篤子(Koishi, Atsuko)
Publisher	慶應義塾大学湘南藤沢学会
Publication year	2014
Jtitle	リサーチメモ : 「ことばの教育の、あした」を考える : 多言語活動のすすめ ,p.43- 55
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	古石篤子(編•著)
Genre	Technical Report
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO92001002-2014-002-0043

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

横浜市立つつじヶ丘小学校における実践報告

古石篤子（慶應義塾大学）　akak@sfc.keio.ac.jp

1. 実現に至るまで
2. アンケートのショック
3. 多言語活動の種類と実践
4. 参加者の感想
5. 今後の課題

1. 実現に至るまで

多くの新しい試みは最初は個人的なイニシアティブで始まるものである。私たちの場合は、横浜市立つつじヶ丘小学校（青葉区）の中澤奈保教諭が興味をもってくれたことからすべてが始まった。中澤教諭は小学校での週1コマの英語の授業[1]の効果に疑問をもっており、子どもたちにもっと豊かなことばの教育ができないものかと考えていた。ちょうどそんなとき、小学校での多言語活動を推進したいと考えていた私と出会ったのである。

二人で話し合ってお互いの考えを練った後、2010年3月に小正校長に会いに行き、私たちの企画について説明をした。その後5月に、中澤教諭が担任をしていた6年1組のクラスで、パイロット授業をフランス語で行うことになった。その授業には児童たちも大変興味を持って参加してくれ、私たちはとても良い感触を得た。校長もパイロット授業を見学してくれていたので、授業後に話し合いをした結果、6年1組だけではなく、6年生全クラス（3クラス）でやるなら、という条件付きで許可がおりることになった。その後、教員会議の承認を得た後に、その許可は正式のものになった。

また、この同じときに、私たちは簡単なアンケートを行った。それは、全部で9時間程度の活動では、子どもたちの言語能力などへの影響は見ることができない[2]が、意識の上での変化なら何か見ることができるかもしれないと考え、彼らの言語や国にたいする意識の調査を行った。そしてその結果が、私のみではなく担任の先生方にも大きなショックを与えることになったのである。それについては、以下2.にて報告する。

こうして、夏休みをはさんで準備をし、9月に正式に企画書を提出して、9月24日に最初の活動が始まった。その活動は翌年2月まで、全部で9回行われることになるのである。多言語活動に対する基本的な考え方や具体的な実施方法については企画書に詳しいので、以下その内容を掲

---

[1] 横浜市には「横浜版学習指導要領」というものがあり、それによって「外国語科」が小学校1年生から設置されている。また、その他に「小学校国際理解教室」というものも1987年より開始されており、国際理解協力員の外国人の先生が英語で自分の国の文化について授業をすることになっている。

[2] Candelier, M. (*et al.*) (2003)によると、多言語活動でなんらかの「効果」を得るためには、最低でも35時間の活動が必要だということである（p.132, pp.151-152）。

載することにする。

横浜市立つつじヶ丘小学校　多言語活動プロジェクト
2010年度　企画書

2010年9月27日
古石篤子（慶應義塾大学総合政策学部 教授）

本年秋学期に貴校において試みようとしている多言語活動は、おそらく日本でもまだ数少ない試みのひとつであろうと思います。5月21日に6年3組において小さな実験授業を試みました。これは授業を行う側が、その対象となる児童の様子を知るために行われたものですが、予想以上に子ども達が活発に興味を示してくれたことにより、秋学期から6年生全クラス（1組～3組）において、「ゆとりの時間」を使って行うことになりました。担任教諭と密にコラボレーションしながら、多くの人的・物的リソースを活用し、共にこの新しい試みを立ち上げてゆくことができればこれに優る喜びはありません。

1．目的

日本のように、現実には多様な言語を使用する人々が住んでいるにもかかわらず、学校教育においては「外国語」科目として、ほとんどの場合英語しか提供されない国にあって、多言語活動は大きな意味をもつでしょう。外国語教育におけるわが国のような極端なモノリンガリズムは世界でも珍しく、言語や文化の多様性に対するこの無自覚さ・無神経さ、そして時代遅れ性には子ども達の将来を危惧させるものがあります。英語の重要性は否定するものではありませんが、小学校から大学まで、その気になれば英語はどこでも学ぶことができるわけですから、せめて小学校では多くの言語に触れる環境を提供してはどうかと考えます。

さて、ひと口に多言語活動といっても、そのやり方（方法・頻度、等）は様々ありうるので、それによって得られる効果は異なってきますが、言語のしくみや多様性に対する気づきを通して、概ね次のことが期待できると考えられています。

・ **開かれた心的態度の育成**：　異なるものに対して開かれた心と寛容の精神を育て、自己相対化を助ける。その意味では、異文化理解教育の一環として位置付けられるが、「文化」を直接扱うことは、ときとして社会に存在するステレオタイプを助長する危険性も併せ持つので、言語そのものを扱うことによってその危険を避けつつ、かつ言語に内在的な文化にも触れることができるのがメリットである。

また、この活動を通じて、異なる言語に触れ、ときには自ら異なる言語を発音したり文字を書いてみたりすることにより、その言語を使って生活している人々への理解を「内側から」「直に」「先入観無しに」感じる経験ができる。そして、そのことによってそれらの言語やその言語が使われている社会への感性を敏感にすることができる。このようにして異文化理解教育は、健全な民主主義的市民社会や平和構築にも寄与することができるはずである。

・ **潜在的な言語能力の育成**： 上の下線部の体験は、同時に言語（一般）への感性を研ぎ澄ます役割をも持つ。特定言語の単なるスキルの習得ではなく、多くの言語を比較する環境に身を置くことにより、言語構造に対しての興味を掻きたて、メタのレベルから言語を見ることを可能にする。また、多くの音に触れておくことは、ある特定の言語を学ぶ際にその学習を容易にするはずである。学校で習った言語と社会に出てから必要になる言語が異なる場合も多い以上、このような異言語学習のバリアを低くすることに寄与する体験は生涯に亘って役にたつものと考えられる。

2. 対象児童

小学6年生3クラス。各クラス男女35人程度。

3. 言語・回数・方法・担当者

・ 言語は、英語以外の次の4言語とする。
  - ➢ 近隣諸国の言語： 中国語、朝鮮語＝韓国語[3]
  - ➢ 英語以外の欧米語： フランス語（提案者が専門とする言語であると同時に、英語の次に身の回りに多く目に付く言語であるため。）
  - ➢ 日本の言語でありつつモード（聴覚／視覚）が異なる言語： 日本手話
・ 回数は秋学期を通じて全9回行う。
  - ➢ 各言語3回ずつ行うが、それぞれの3回目は最後に同日に4言語同時に行い、生徒が好きな言語を選んで活動できるようにする。（日程は以下参照）
・ 方法は、6年生の各クラスで別々に行う。最後の回は希望する言語毎に行う。
・ 担当者
  - ➢ フランス語： 古石篤子（コイシ・アツコ）
  - ➢ 中国語： 重松 淳（シゲマツ・ジュン） 元慶應義塾大学総合政策学部教授
  - ➢ 朝鮮語＝韓国語： 金 順玉（キム・スノク）
    フェリス女学院、NHKラジオ講座等講師
  - ➢ 日本手話： 数見陽子（カズミ・ヨウコ）
    国立障害者リハビリテーションセンター手話通訳学科、ソフトバンク手話講座講師、ろう者劇団団員

[3] 朝鮮半島で話されている言語に対しては呼称が複数あるが、講師とも話し合いの結果、このようにすることに決定した。

4．日程

- フランス語　　9月24日、10月8日
- 中国語10月29日、11月5日
- 朝鮮語＝韓国語　11月12日、12月17日
- 日本手話　　1月17日、21日
- フランス語、中国語、朝鮮語＝韓国語、日本手話　　2月14日

5．評価

Evlang（欧州の言語への気づき運動）[4]の評価によると、多言語活動の効果を測定するには最低35時間の実施が必須とありますので、量的評価は難しいかもしれません。しかし、この活動が試みである以上、なんらかの仮説を立て、実践が終った段階で児童の反応を探りたいと考えています。可能性としては、開始前にアンケートを行いましたので、終了後にも同様のアンケートを行い、変化を見ることができればと思います。

以上。

2. アンケートのショック

開始前に行ったアンケートでは、児童たちの世界の国々や言語に対するイメージを知りたいと思い、次のような質問をしてみた[5]。

1．好きな国はどこですか。それはなぜですか。
2．嫌いな国はどこですか。それはなぜですか。
3．行ってみたい国はどこですか。それはなぜですか。
4．習ってみたい外国語はありますか。それは何語ですか。
5．今まで外国に住んだことがありますか。それはどこで、期間はどのくらいですか。

計画をした段階では、活動の前と後で変化が出たら面白いのではないかと想定して行ったのであるが、実際には最初のアンケート結果だけを見て、私たちは仰天した。それは1と2の質問に対する答えのせいであるが、以下それについて略述しよう。

まず「嫌いな国」については、次のような結果が出た。「北朝鮮」(41.35%)、「中国」(25%)、「中国と北朝鮮」(12.5%) となり、この3種類の回答を合わせると80%近くにもなる。

表1：「好きな国」「嫌いな国」(活動前：2010年5月)

---

[4] EvlangやEOLEの詳細について日本語で書かれた文献については、志賀 (2004)、Perregaux (2007a) (2007b)、古石 (2008)、大山 (2014) を参照のこと。

[5] あるところでこのアンケートについて話をしたところ、小学生にこのような質問をすることに対して疑問が出された。国のイメージや「〜人」という固定観念を助長する危険性があるということであろう。それについては担任の先生方も感じておられたので、あとの授業で極力フォローしてもらうようにお願いした。

質問	国	生徒数	割合(104 人中)
嫌いな国	北朝鮮	43	41.35%
	中国	26	25%
	北朝鮮と中国	13	12.5%
	以上の合計	82	78.85%
好きな国	日本	42	40.38%

また、「好きな国」については、40.38%もの児童が「日本」と答えたことにも私たちは驚いた。ふつう好きな国はどこかと答えたら、自分の国以外を答えるものだと考えていたからである。西川長夫著『国境の越え方』(1992) にも、同様の質問に対して、彼の大学の講義の受講生が「好きな国」のトップに日本を挙げていることを取り上げ、これは最近の傾向であり、30 年ぐらい前には考えられないことであったと論じている。

いずれにせよ、担任の教諭 3 名がともに驚いたと語っていたのは、嫌いな理由に関して、中国については「毒ギョーザ事件」や著作権の侵害、北朝鮮に関しては拉致問題やミサイル発射等が挙げられ、アンケートをとった時点でのマスメディアの影響がそのまま反映しているように見えたことである。

また、日本が好きな理由としては「安全だから」、「きれいだから」、「衛生的だから」等が挙げられたが、これらも周囲の大人たちの言説が反映されているように見える。なぜなら、彼ら自身は比較できるほど他の国々を知らない。最近の若者が内向きで、留学希望の学生も減少しているという傾向などもこのようなところと根はつながっているかもしれない。

ついでに、多言語活動終了後に行ったアンケート結果についても表 2 に記しておこう。「嫌いな国」として北朝鮮と中国を合わせた数字 (75.76%) も、「好きな国」としての日本 (27.27%) もそれぞれ数字は減っているが、統計的処理を行った結果、「嫌いな国」に関しては「前」と「後」とで有意ではないが、「好きな国」に関してはその減少は有意であると出た。つまり多言語活動がなんらかの効果をもたらした可能性がある、ということである。断言はできないのであるが。

表 2 ： 「好きな国」「嫌いな国」(活動後：2011 年 2 月)

質問	国	生徒数	割合 (99 人中)
嫌いな国	北朝鮮	46	46.46%
	中国	27	27.27%
	北朝鮮と中国	2	2.02%
	以上の合計	75	75.76%
好きな国	日本	27	27.27

また、もうひとつ大変興味深い変化が見られた。それは、多言語活動前には「好きな国」として韓国を挙げた児童は1人もいなかったが、活動後にはその数は 10 人にもなった！これは驚くべき増加であり、はっきり活動の効果があったと言えるであろう。一方、中国を好きな国として挙げたのは、活動前には4人であったが、活動後には微減の3人になった。

いずれにせよ、このアンケート結果が示すところは、全般的に子どもたちが近隣諸国に対して極めてネガティブな印象をもっていること、そして彼らのなかに、Perregaux 氏などが危惧する自民族中心主義（ethnocentrisme）の芽生えが感じられるということではないだろうか。と同時に、教室での情報の与え方によっては、生徒がそれらの国々に対して関心をもったり、好感をもったりすることができるということも示されている。教育の役割は大きい。

3. 多言語活動の種類と実践

ひとくちに多言語活動と言っても、そのやり方には大きく分けて2つのタイプがある。それらを仮に「A.直列型」と「B.混在型」と名付けよう。

前者は、私たちがつつじヶ丘小学校で行った活動のようなタイプの活動である。そこでは全体として4つの言語を扱ったが、フランス語 → 中国語 → 朝鮮語＝韓国語 → 日本手話の順に扱い、1つの授業では1つの言語しか扱わなかった。規模は比較にならないが、イギリスの Discovering Language Project はこのタイプのものであり、2年間でフランス語、ドイツ語、ラテン語、日本語、スペイン語、パンジャブ語の6言語に順に触れる（福田 2007）。

それに対して後者は、フランス発の Evlang やスイスの EOLE のように、1回の授業のなかで複数の言語を扱う活動である。例えば、1 回の授業のなかで、月の名称をさまざまな言語で生徒に提示して、音を聞かせたり、類似点や相違点に気づかせたりさせるタイプの活動である。

それぞれに長所と短所があるので、それをまとめると以下の表のようになる。

表3：　多言語活動の種類

	長所	短所
A.直列型	- 特定の言語を「学んだ」という意識がもてる - 教材作成が比較的容易 - 文化の導入が容易	- 対象言語がある程度できる人がいないとやりにくい - 言語間の比較・対照などは意識的に行わなければならない
B.混在型	- マニュアルさえあれば誰でもできる - 言語間の比較・対照が容易	- 教材作成にアイデアと時間が必要 - 特定の言語を「学んだ」という意識はもてない

言語記号の間の類似性や相違性に気づかせてメタ言語的能力を育成するには混在型の方が適

しているかもしれないが、日本のように日常生活や学校において日本語と英語にしか触れることのない環境では、単語のレベルだけではなく、様々な言語の表現や構造に少しだけでも触れ、「中国語」や「フランス語」はこういう言語だという感触をつかむことは極めてたいせつではないかと思う。また、今回のように朝鮮語＝韓国語の時間にハングル文字を覚えて書いたりする活動を取り入れることができたのは直列型のメリットであろう。その他、直列型の方が、その言語を使っている社会の文化も導入しやすい。

つつじヶ丘小学校で直列型を選んだのにはこのような理由の他に、教材作成が比較的容易だということがある。混在型の教材を作るには、様々な言語の知識とアイデアが必要なので時間がかかる。今回は実施の決定から実践までの間が4ヶ月ほどしかなかったので、混在型でやろうと思っても、その教材作りは間に合わなかったであろう。

直列型の短所としては、対象言語がある程度できる人材無しでは実施が困難だということが挙げられる。今回は運良くこれ以上望むことのできないほどの日本でもトップクラスの人材を講師に迎えることができたが、これを一般化できないところに今後の大きな課題があろう。教材がある程度整った後なら、少しぐらい講師のレベルが下がっても支障はない。それでも、その言語をある程度学習して身につけた人間しか教えることができないのでは、広く普及するにはネックとなろう。

また、他の言語との比較は意識的に行わなければならない。例えば、フランス語で月の名称を扱ったときに英語との類似性を活用したが、準備段階でそのようなことを意識的に取り入れなければならない。教材がある程度整った段階でガイドブック作成が必要となる。

一方、混在型は上で述べた直列型の短所が長所に、長所が短所になる。一番の長所は、教材さえきちんとできていれば、特定の言語の素養がなくとも、適切なガイドブックがありさえすれば誰でも活動をリードすることができるということである。Evlang や EOLE はこのタイプの多言語活動で、それぞれ立派なガイドブックと教材集がある（Kervran, M.（*et al.*）(2006)、Perregaux, C.（*et al.*）(2003)）。また、言語間の比較や対照は、それが目的で活動が組み立てられているので、自然と行われるように仕組まれている。しかし、そのための教材作りには想像もできないほど多くの時間が必要である。また、もう一つの短所としては、このタイプの活動は、それを行ったとしても、「○○語をやった」という意識は決してもつことができないことである。「○○語」で少し会話をしたり、その社会の文化を学んだりすることが多言語への意識を拡げ、関心を呼び起こすきっかけになるのではないかと考えると、これは少々残念にも思われる。

さて、つつじヶ丘小学校での実践について少し記そう。実践の実際は企画書のとおりであるが、日本手話以外の 3 言語に関しては、講師の他に、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス（SFC）の学生たちが助手としてついた。彼らは講師の指導のもとに、パワーポイントやプリントの教材なども手作りし、教室での活動も積極的に行った。小学生にとっては、自分と年齢の近い「お姉さん」「お兄さん」たちが、英語以外の言語を使いこなすのを間近で見るのは刺激的だったようだ。終った後に大学生を取り囲んでお話を聞いたり、サインをもらったり（！）していた。

日本手話に関しては、担当講師に通訳（日本手話／日本語）を同行してもらった。言語を教える部分は直接法によったので、多くの場面で通訳は不要であったが、ろう文化に触れる部分にはどうしても通訳が必要となった。

内容に関しては、日常的な挨拶表現と数字を1から20まで入れること以外は、各言語で自由にしてもらった。また、原則として書くことには力を入れなかったが、朝鮮語=韓国語の場合は例外で、「ハングル体操」を通じてハングル文字を導入した。これによって子どもたちは2回の活動を通じて、表音文字としてハングルを使うことができるようになった。

4. 参加者の感想

4.1. 生徒の感想

活動終了後に参加児童全員に対してアンケートをとった。自由記述式にしたので、回答に含まれるキーワードを、(1) 正のカテゴリーに分類できるもの（活動をポジティブに評価）、(2) 負のカテゴリーに分類できるもの（活動をネガティブに評価）、(3) メタ言語のカテゴリーに分類できるものの3種類に分けて集計してみた。

(1) 正のカテゴリー

順位	キーワード	人数（人）	割合（%）
1	よかった	22	21
2	楽しかった	21	20
3	面白かった	20	19
4	わかりやすかった	14	13
5	役に立つ	11	10
6	使いたい	9	8
7	勉強になった	8	7
8	うれしかった	6	6
8	興味をもった	6	6
8	もっとやりたい	6	6

(n=107)

(2) 負のカテゴリー

順位	キーワード	人数（人）	割合（%）
1	難しい	18	17

(n=107)

このカテゴリーに入るキーワードが少ないことが特徴と言える。また、「難しい」と書いた回答も「難しかったが、楽しかった」とか「難しかったが、よかった」のように、他の正のカテゴリーに入る語と同時記述のものが多かった。

「難しい」と同時記述の上位３語

順位	キーワード	人数（人）	割合（%）
1	楽しかった	5	28
2	よかった	4	22
3	驚いた	3	17

(n=18)

(3) メタ言語のカテゴリー

上記(1)にも(2)にも入らないような、言語自体に対する感想をこのカテゴリーに入れた。

順位	キーワード	人数（人）	割合（%）
1	驚き	11	10
2	類似	10	9
3	身近さ	7	7
4	意外に簡単	6	6
5	相違	5	5
6	気づき	2	2

(n=107)

児童の記述をいくつか紹介しよう（引用は原文のまま）。

【驚き】

- 普段は習えない言葉なので、知らないことがたくさんあって驚きました。
- フランス語：以外に身近にあるような言葉でも、僕達が思っていた意味ではないものもたくさんあったので驚きました。
- 日本の漢字の意味と中国の文字の意味が全然違うことにびっくりしました。

【類似・相違】

- 世界の言葉には、日本語に似ていたり、似ていなかったりしておもしろかった。
- 日本語と似ているところがあったりしたのでおもしろいなと思いました。世界のつながりを感じられました。
- どの言語も日本語に近いものがあった。
- 中国語：中国と日本で使われている漢字は、一緒のものもあった。だからクイズでは大体の見当がついた。一番身近な国なのでためになった。
- 朝鮮・韓国語の言葉は日本語に似ているけど意味が全然違っていて、驚きました。
- 中国：近いのにあまりにていなかったり、似てたりして驚きました。

【身近さ】

- すべて身近な所にあるので習ったかいがとてもあった。

－フランス：意外にも身近にあってびっくりしました
【意外に簡単】
－日本手話はとても難しいものだと思っていたけれど、意外と簡単でとても楽しかったです。
【気づき】
－普段良く使っている言葉がフランス語だったりしておもしろかったです。

その他、次のような感想もあった。
－話したりする以外にも、文化を教えてくださってどれもよかったです。
－特に中国語は世界の約1/5の人と話せるのでとても便利だと思った。
－朝鮮・韓国語では日本語で訳してある５０音表がもらえたので先生が言っていたように、ヒミツの交換ノートなどに使ってみたいです。
－韓国：文字に仕組みがあったり、暗号にできたりして、楽しかった。

多言語活動全体に関する感想としては次のようなものが印象的であった。
－【生徒１】すべてに共通して学ぶことができたのは、「相手に伝える大切さ」です。英語が使えなくても耳が聞こえなくても、「自分から伝えることは大切なんだ」と感じました。
－【生徒２】自分の普段使っている言葉以外にもたくさんの言葉があって、同じ国でも自分の全く知らないような言葉があってすごいと思った。
－【生徒３】多言語活動をやったおかげで「はじめて」をたくさん知ることができました。
－【生徒４】最初の方は興味しかなかったけど、とちゅうから「言葉の大切さ」が分かってきたと思う。
－【生徒５】いろいろな言葉を習ったけれど、日本語は覚えるのが大変だなあと思った。同じ地球の上に住んでいるのにこんなに言葉がちがうのは不思議だなあと思った。

総体的に子どもたちは多言語活動に興味をもち、実際に使ってみたいとか、もっとやりたいという気持ちをもったようだ。次のような印象は代表的なものであろう。
－【生徒６】この多言語活動で私が思ったのは今すぐ習ったことをやってみたいと思いました。もっと交流の輪が広がったことで、フランス語を使っている国の人、中国人、韓国人、手話をやっている人と今後は積極的に交流したいです。

4.2. 教員・大学生の感想

担任教員や大学生も多言語活動を通じて新しい経験をしたようである。
－【教員１】子ども達も私もですが、言葉ってこんなにいろいろな種類があるんだ、しかも結構身の回りにたくさんあった、と気付かされました！私自身が英語偏重にすっかりいつの間にか浸かってしまっていることに気付かされて問題を感じました。世界の広さ、多様性を感じ、と同時に国内の、周囲の韓国や中国の人に対して意識が変わったように感じます。多様性という

ことは子どもを見る目にも通じると思います。授業では、子どもの言語や音声に対する豊かな感受性と吸収力に驚かせられました。不思議なことに中国語が入りやすい子、韓国語が入りやすい子、フランス語が好きな子、といるということです。多様な言語に、子どもたちはそれぞれの個性を生かされ、楽しめたことと思います。よい経験ができたと思います。英語以外にも学ぶ機会があれば、英語が不得意なだけでコンプレックスを感じることもない気がします。

- 【教員２】今までは、文化や食べ物などの違いや共通点などからその国を理解する方法でした。しかし、言語を通して文化などを学ぶことによりまた違った異文化理解につながったような気がします。「その国の人と会話したい」という願いをもった児童も見られ、これについては私自身初めての反応でした。
- 【大学生】とーっても楽しかったです!! 準備は大変でしたが、つくった教材を使って小学生に「教える」という経験が、私の中で“革命”を起こしました。小学生の気持ちになって考え、授業を進めました。すると子ども達は、私達が伝えたことをどんどん推測し、吸収し、声に出し、体を動かし... という様に、体に入って行く様な感覚が、とても不思議だったと同時に、責任感と、子ども達に変化を与えられることの喜びを感じました。今回の経験を通して、更に教育について学びたいと思い、今年度から教職課程を履修しています☆

教員１の感想のなかに「英語以外にも学ぶ機会があれば、英語が不得意なだけでコンプレックスを感じることもない気がします」というものがあったが、重要な指摘であろう。学校で教えられる外国語が英語だけの場合、それに興味が持てない子どもは、「外国語」というもの一般に対して苦手意識を持ってしまう可能性が高い。いくつか選択肢があれば、いろいろ試してみて、自分に合う言語を選んで学ぶことができるはずである。現実問題として、すべての中学校や高等学校で４つも５つも外国語を提供するのは難しいとしても、せめて２つ、あるいは３つぐらいは提供できないものであろうか。

5. 今後の課題

つつじヶ丘小学校での多言語活動はおそらくこの種のものでは日本で初めての試みだったと思われるが、概ね成功のうちに 9 回を終了した。しかし、翌年には校長が他校へ転出したため、多言語活動は中止となった。中澤教諭も１年生の担任に変わり、協力してもらった３名の教諭のうち１名がやはり他校へ転出したことも継続を困難にした。新校長とも面会して意義を説明したが、残念ながらその後は実現していない。このように多言語活動を普及してゆくには、まずその実践校の確保をはじめとしてさまざまな課題が山積している。その他の課題を以下に列挙する。

- 多言語活動を行う主体（講師）の人材確保と養成が必要である。このような活動の意義を理解し、実践できる人材を育ててゆかねばならない。
- 次に、教材開発と蓄積が必要である。Evlang や EOLE の教材はあるが、それがそのまま日本の教育環境に合うわけではないので、日本の学校に合った教材作りは喫緊の課題である。そのときに「直列型」にするのか「混在型」にするのかも検討する必要がある。これはおそらく多言

語活動に当てることのできる時間数にも左右される事柄であろう。

- 最後に、このような活動の意義を客観的に示すことができるようにするためにも、評価方法の開発も重要である。つまり、実践と理論を組み合わせたより大規模な研究が必要であるので、そのためにも予算の獲得は重要な課題である。

小学生のときに多言語活動をしたことが、将来的にその子どもの人生になんらかの影響を与えるかどうか、ほんとうはそんなことも長期にわたって調べてみたいことがらではある。

文献リスト

大山万容（2014）「言語への目覚め活動の発展と複言語教育」『言語政策』第10号、日本言語政策学会、pp. 47-71.

古石篤子（2008）「ヨーロッパの挑戦：EvlangとEOLE」『言語教育における多様性について：初等・中等教育における政策と実践（2）』慶應義塾大学21世紀COEプログラム「総合政策学ワーキングペーパー」No. 137, pp. 28-36.
http://coe21-policy.sfc.keio.ac.jp/ja/wp/WP137.pdf

志賀淑子(2004)「フランス語圏スイスの EOLE アプローチ—ジュネーブにおける『多言語に開かれた学校』での実践—」吉島・長谷川(編)『外国語教育III—幼稚園・小学校篇』朝日出版社、pp. 98-116.

西川長夫（1992）『国境の越え方』筑摩書房.

福田浩子（2007）「複言語主義における言語意識教育—イギリスの言語意識運動の新たな可能性—」『異文化コミュニケーション研究』第19号、pp. 101-119.

Perregaux, C.（2007）「多言語に開かれた心を育む学校教育（EOLE）—社会・教育的アプローチのスイス、ヨーロッパ、世界における研究と普及—」（志賀淑子訳）『外国語教育IV—小学校から中学校へ—』（吉島・長谷川編）朝日出版社, pp. 142-152.

Perregaux, C.（2007）「スイスにおける多言語に開かれた言語教育—その目的、戦略、政治的選択—」（志賀淑子訳）、同上、pp. 153-162.

*

Candelier, M.（*et al.*）(2003), *L' éveil aux langues à l' école primaire, Evlang : bilan d' une innovation européenne*, Bruxelles : De Boeck.

Kervran, M.（*et al.*）(2006) *Les langues du monde au quotidien - Observation réfléchie des langues: Cycle 2, Cycle 3*, Rennes: CRDP.

Perregaux, C.（*et al.*）(2003), *Éducation et ouverture aux langues à l' école*, vol. 1 et 2, Neuchâtel : SG/CIIP.

*

つつじヶ丘小学校小学校での試みについての日本語での実践報告はこれが初めてであるが、英語とフランス語では以下のものがある。

Koishi, A. (2012): "Multilingual Activities in an Elementary School in Yokohama, Japan: An Attempt to Overcome Institutional Monolingualism", in *Literacy for Dialogue in Multilingual Societies*, Proceedings of Linguapax Asia Symposium 2011, pp. 59-70.

Koishi, A. (2014): 《 Activités multilingues dans une école élémentaire au Japon—Une tentative pour dépasser le 《 monolinguisme 》 institutionnel— 》, in *Didactique du plurilinguisme: Approches plurielles des langues et des cultures, Autour de Michel Candelier*, Troncy, C. (dir.), Presses Universitaires de Rennes, pp. 295-303.